

「東北体育・スポーツ科学研究」投稿の手引き

本学会の機関誌「東北体育・スポーツ科学研究」は、オンライン投稿により行います。電子ジャーナルによる公刊に関しては、掲載可と判定された論文は、できるだけ速やかに電子ジャーナル版として掲載されます。できるだけ多くの方々が投稿され、また編集実務が円滑に進むことになれば幸いです。本投稿の手引きは、体育学会の機関誌「体育学研究」の手引きに準じています。ただし、本誌は自動投稿・審査システムを採用しておりませんので、投稿手続きに違いがありますので、ご注意ください。なお、論文掲載の可否に関する「論文審査に関する申し合わせ」、および「論文審査要領」につきましては、体育学研究の内容に準じます(<http://taiiku-gakkai.or.jp/kikanshi>)。ご参照ください。

目次

- I. 投稿原稿の種類
- II. 電子投稿
- III. 原稿の作成
- IV. チェックリスト

- I. 投稿原稿の種類 投稿規定3に定められているように、本誌に掲載される論文の種類には、原著論文、実践論文、事例報告、研究資料、総説、書評、内外の研究動向、研究上の問題提起、論評があります。また、投稿規定4に定められているように、投稿論文における使用言語は日本語に限られます。
1. 「原著論文」は、科学論文としての内容と体裁を整えているもので、新たな科学的な知見をもたらすものであることが必要です。ただし、人文系と自然系の論文構成には違いがありますので、論文の構成や見出しはそれぞれの研究領域に応じて適切なものを用いてください。
 2. 「実践論文」は、現場からの貴重な情報を基にした研究で、指導法に関する実用的研究や、総合的に分析した研究などが含まれます。
 3. 「事例報告」は、特定の少数の事例を詳細に調査・研究し、その結果を報告することによって、体育学の発展に寄与できるものです。
 4. 「研究資料」は、調査や実験の結果を主体にした報告であり、体育学の研究上、客観的な資料として価値が認められるものです。この場合、原著論文に必要な見出しや、それに相当する内容のすべてを含む必要はありませんが、関連研究とのつながりの中で、その資料を提出することの意義が明らかであり、資料そのものの説明が十分になされていることが必要です。
 5. 「総説」は、特定の研究領域に関する主要な文献内容の総覧ですが、その内容は、単なる羅列ではなく、特定の視点に基づく体系的なまとまりを持つことが必要です。
 6. 「書評」は、本学会の諸分野にかかわる単行本の全部または一部の概要が明瞭であるとともに、その内容に従った問題提起を含むことが必要です。
 7. 「内外の研究動向」は、国内外の研究動向のうち、会員に周知させることが望まれるものに限りません。

8. 「研究上の問題提起」とは、本学会に関係のある諸分野での重要な問題提起であり、必ずしもその妥当性が検証されている必要はありません。しかし、十分に理論的であり、その仮説の組み入れによる研究・実践上の有効性、および追試等による立証の可能性が期待されるものであることが望まれます。
9. 「論評」とは、本誌上に掲載された原著論文などに対する批判や質疑ですが、論評の対象となる論文の研究領域や研究内容についての十分な知識に基づいた論理的、科学的なものであることが必要です。

II. 電子投稿

1. 「東北体育・スポーツ科学研究」では、投稿をオンラインのみで受け付けます。
2. 投稿は、下記ウェブサイトアクセスし、投稿してください。
オンライン投稿: <http://jspehss-tohoku.com//form/>
3. 表紙、本文、図表、写真、その他の資料のアップロードに際して、すべてpdfファイルに変換して下さい（ファイルサイズの制限はありません）
4. 原稿が受理された場合、著者が図表、写真、その他の資料を割り付けた完全原稿を作成し、入稿フォームから入稿します。最終原稿は編集委員会で最終確認した後、学会のウェブサイトに掲載されます。
5. 「東北体育・スポーツ科学研究」の編集事務局への連絡は、次の通りです。
E-Mail: toshihiko.fujimoto.d3@tohoku.ac.jp

III. 原稿の作成

1. フォーマットと文字数
 - 1) 原稿のフォーマット
原稿は、文書作成ソフトで作成してください。A4 判縦置き横書きとし、全角40字30行(英文綴りおよび数値は半角)で、上下左右に約3cmの余白をとり、フォントの大きさは10.5ポイントにしてください。図表、写真、その他の資料も、A4 判縦置き横書きとし、上下左右に約3cmの余白をとり、本投稿の手引き4.「図表、写真、その他の資料の作成」に従って作成してください。本文は現代かなづかいとし、外国語をかな書きする場合は、カタカナで表記してください。本文および文献表には、ページ下部中央に通し番号をつけてください。また、審査員が要修正事項や照会事項を指摘しやすくし、また著者が修正対応表(回答コメント)で修正・対応箇所を明示するために、本文および文献表の左側に行番号(ページごとに振り直し)を付加してください。
 - 2) 文字数の計算方法
投稿規定に定められている規定文字数を確認し、規定文字数以内に収めて投稿してください。なお、図表、写真、その他の資料を含める原稿は、投稿規定7.に基づいて、図表、写真、その他の資料を文字数に換算します(1 ページ=1800 字)ので、下記の例を参考に、正しく計算してください。

[例]

①文字数 25,000 字, 図表が 4 ページの原著論文の場合

$1,800 \times 4 + 25,000 = 32,200$

$32,200 - 29,000 = 3,200$

この場合, 3,200 字超過となります.

②文字数 25,000 字, 図表が $2\frac{1}{4}$ ページの原著論文の場合 $1,800 \times 3 + 25,000 = 30,400$

$30,400 - 29,000 = 1,400$

この場合, 1,400 字超過となります.

2. 論文作成上の注意

1) 投稿は, 原則として以下のファイル (①表紙・②本文 (文献リスト含む), ③表, ④図, ⑤その他資料) をアップロードして下さい.

表紙には題目, 英文表題, 著者名, 所属機関名, 希望する原稿の種類, 編集委員会への連絡事項および投稿論文責任著者の氏名および連絡先 (所属機関, 所在地, 電話, ファクシミリ, 電子メールアドレス) を記載して下さい.

異なる機関に属する者が共著である場合は, 各所属機関に番号をつけて氏名欄の下に一括して示し, その番号を対応する著者の氏名の右肩に記して下さい.

2) 題目

題目は, 和英文ともに研究の内容を的確に表現しうるものであることが必要です. 副題をつける場合には, コロン(:)で続けてください. 英文タイトルの最初の単語は, 品詞の種類にかかわらず第1文字を大文字にしてください. その他は, 固有名詞など, 特に必要な場合以外はすべて小文字とします.

3) 所属機関名および同所在地 (この情報は本文に記載せず表紙ファイルにのみ記載して下さい)

所属機関名は著者, 共著者ともに, 省略せずに正式名称を書いてください.

(1) 大学の所属が学部の場合は学部名を, 大学院の場合は研究科名を明記してください.

(2) 官公庁や民間団体の場合は部課名まで記入してください.

4) キーワード

キーワードは, 論文の内容や特色を的確に示し, 検索に役立ち得るものとします. 題目はそのまま検索の対象になりますので, 題目に含まれていないものをキーワードとして記入してください. なお, キーワードは, 3つ以上5つまでを, 和文と英文の両方で作成してください.

3. 本文

1) 見出し

見出し語は適宜用いることができます.

2) 符号

次のような符号を用いることができます.

(1) ピリオド(.)およびコンマ(,)

(2) 中黒(・)

相互に密接な関係にあつて、一帯となる文字や語句などを結ぶ際には中黒(・)を用います。アルファベット文字を用いた用語には、中黒は使えません。

[例] 被験者 Y・K→Y. K.

(3) ハイフン(-)これは対語・対句の連結，合成語，ページの表記に用い，半角とします。

(4) ダッシュ(―) 全角 1 文字分のダッシュ(一)は期間や区間を示すのに用います。波ダッシュ(～)は原則として用いません。全角 2 文字分のダッシュ(——)は注釈的な説明をするのに用います。

(5) 引用符は，和文の場合には「」を，英文の場合には“”を用います。

(6) コロン(:)

副題，説明，引用文などを導く場合に用います。

(7) セミコロン(;))

複数の文献が連続する場合に用います。

(8) 省略符(…)

引用文の一部あるいは前後を省略する場合は，和文の場合には 3 点リーダー(…)，英文の場合には下付の 3 点リーダー(...)用いてください。

3) 数字

(1) 数を表示する場合は，原則としてアラビア数字を用いてください。

(2) 文字や記号の隅につける添え字はその位置に明瞭に表記してください。

4) 単位

計量単位は，原則として，国際単位系(SI 単位系)とします。

5) 略語

論文中において高い頻度で使用される用語に対して，著者が便宜的に省略した語を用いる場合は，初出時に略さず明記し，(以下「・・・」と略す)と添え書きしてから，以後その略語を用いるようにしてください。

6) 引用

論文中で文献を引用する場合には，基本的な文献を厳選し，正確に引用してください。引用した文献はすべて文献表に掲載してください。本文中の文献は原則として著者名，発行年，引用ページで示します。ただし，この方式で表記することが著しく困難な場合はこの限りではありません。

(1) 本文中で文献の一部を直接引用するときは，引用した語句または文章を，和文の場合には「」，英文の場合には“ ”でくくります。

[例]

①「体育科教育学の開拓者」(高橋，2009，p.171)と称される・・・

②“Women and Athletics”(Miller，2004，p.150)と表記し・・・

- (2) 著者が2名の場合、和文の場合には中黒(・)、英文の場合には“and”を用いてつなぎます。ただし、著者が3名以上の場合は、筆頭著者の姓の後に、和文の場合には「ほか」、英文の場合には“et al.”を用います。

[例]

③ 「……………」(阿江・藤井, 2002, pp. 87-88)という結論は……………」

④ “……” (Morgan and Hansen, 2007, p.100)という考え方には……………」

⑤ 「……………」(松澤ほか, 2000, pp. 26-27)という結論は……………」

⑥ “……” (Nikos et al., 2009, p. 143)の視点は……………」

⑦ 「……………」(新村編, 2008, p. 689)という意味で……………」

- (3) 本文中で参照した文献を明記する場合には、次のような形で著者名、発行年、参照ページを記入し、参照しているページが複数ある場合には、括弧内の参照ページをコンマ(,)でつなぎます。なお、参照ページが限定できない(文献全体を参照している)場合には、ページは省略します。同一著者の文献が複数ある場合には、括弧内の発行年をコンマ(,)でつなぎます。同一著者の同一年に発行された複数の論文は発行年の後に a, b, c, ……をつけて区別します。複数の文献が連続する場合はセミコロン(;)でつなぎ、筆頭著者のアルファベット順を優先して列挙します。

[例]

⑧ 荻山ほか(2012)によれば……………」

⑨ 清水(2009, pp. 3-4)は……………」

⑩ 菊(2006, pp. 17-18, pp. 27-30)の議論では……………」

⑪ 文部科学省(2011a, 2011b)による一連の報告では……………」

⑫ 斎藤・名雪(2001, p. 65)によれば……………」

⑬ Cho (2002, pp. 59-60)および Kang et al. (2007, p. 145)の見解は……………」

⑭ Markovic and Mikulic (2010, p. 890)によれば……………」

⑮ An (2004, 2008)の一連の研究では……………」

⑯ ……との見解が多い(真鍋, 2009, pp. 390-395;宮本・日高, 2005, pp. 271-275;角田ほか, 2010, pp. 90-92)。

⑰ 例えば、目的地的サンプリングによるインタビュー調査(Bechtel and O’ Sullivan, 2007, pp. 221-223; Sherman et al., 2010, pp. 2-5)を用いた……………」

- (4) 翻訳書の著者を表記するときは、カタカナ表記とします。

[例]

⑱ ベルクソン(2001, p. 87)は「……………」と述べている。

- (5) 翻訳書と原著の両方を引用したときには、翻訳書は上記(4)に従って記入します。原著は英文表記とします。

[例]

⑲ サンドエル(2010, p. 10)によれば……………」しかしながら, Sandel (2009, p. 56) では…。

(6) WEBサイト(いわゆるホームページ)やWEBサイトに掲載されているPDFファイルなどを参考文献とする場合は、(著者名, 発行年)または(著者名, online)のように表記します。発行年やファイル名が特定できない場合は、(著者名, online)と表記します。同一著者の同一年に複数のWEBサイトが掲載された場合は、発行年の後ろにa, b, c, …をつけて区別し、発行年が特定できない場合は文献リストの表示順(1, 2, 3, …)をつけて区別します。

[例]

㊸ 神奈川県立体育センター指導研究部(2006)の調査では、…

㊹ との報告がある(科学技術振興機構, online1)。一方で、科学技術振興機構(online 2)によれば、

…

㊺ との報告がある(U. S. Department of Health and Human Services, online)。

7) 注記

注は本文あるいは図表、写真、その他の資料で説明するのが適切ではなく、しかも補足的に説明することが明らかに必要なときのみ用います。その数は最小限にとどめてください。注をつける場合は、本文のその箇所に^{注1)}、^{注2)}のように通し番号をつけ、本文と論文末の文献表との間に一括して番号順に記載します。注記の見出し語は「注」とします。

8) 特殊文字

(1) ゴシック

ゴシックは見出し語のみに使用し、本文中の特定語句を強調するためのゴシック体の使用はさけてください。

(2) イタリック

次の場合にはイタリック体を使用することができます。

①数式中の数

②数値や量

③統計法に用いられる記号

④動物・植物の学名

本文中の欧語を強調するためにイタリック体を使用することは、引用の場合などを除いて避けてください。

(3) アンダーライン

文意を強調するためのアンダーラインは使用しないでください。

4. 図表、写真、その他の資料の作成

図表、写真、その他の資料は投稿規定7から9に従って作成してください。図表、写真、その他の資料は、その大きさが刷り上りと同様になるように作成してください。作成する場合のフォントの大きさは、和文の場合は明朝体8ポイント、英文の場合はセンチュリー体9ポイントを目安としてください。図表、写真、その他の資料が多い場合は、規定ページ内になることが確認できるよう、合計で4ページ以内にまとめたもの(A4サイズにキャプション付きの図表、写真、その他の資料を

順番や向きに関係なく並べることができます)を添付してください。なお、1 ページ当たり 1 点の図表、写真、その他の資料をレイアウトしたものに加えて、別途作成してください。図題、表題、それらの見出しや説明文、注は英文抄録の理解を助けるために、できるだけ英文とすることが望ましいですが、同一論文で和文と英文の併用はさけてください。なお、表注は表の下に一つ一つ改行し、注符号は上つきダガーで †, †† などの順に用い、アスタリスク(*, **, ***)は統計学上の有意水準を示すときにのみ用いるものとします。

5. 文献表の作成

文献表の見出し語は「文献」とし、本文中に記述された引用及び参考文献についてのみ記載することを原則とします。文献の記載は原則として著者名のアルファベット順とし、書誌データには通常、著者名・発行年・題目(書名)・誌名・出版社・ページなどの情報が含まれます。書式は下記の例にならい、各文献の 2 行目以降は 1 文字下げてください。

1) 定期刊行物(いわゆる雑誌)の書き方

定期刊行物の場合の書誌データの表記は、著者名(発行年)論文名. 誌名, 巻(号): ページ. の順とします。

(1) 著者名および発行年 共著の場合、和文の場合には中黒(・)、英文の場合には“and”で続けます。ただし、英文で3人以上の場合にはコンマ(,)でつなぎ、最後の著者の前だけに“and”を入れます。発行年は著者名のすぐ後の()内に記入し、論文名と区切ります。著者名の前に番号は不要です。同一著者、同発行年の複数の論文を引用した場合は年号の後に a, b, c, …をつけます。

[例]

① 小池関也・森 洋人・阿江通良(2006)

② Villarreal, E. S., Requena, B., and Newton, R. U. (2010)

③ Crossley, N. (2001a) The social body....

④ Crossley, N. (2001b) The phenomenological habitus and....

(2) 論文名

論文名の最後はピリオド(.)を打ちます。英文では、題目の最初の文字だけを大文字にします。

(3) 誌名

和文誌の場合は略記せず、必ず誌名全体を記載してください。英文誌の場合は、その雑誌に指定された略記法、または広く慣用的に用いられている略記法に従います。それ以外は省略しないでください。誌名の最後はコンマ(,)をつけてください。

(4) 巻号およびページ

巻数の後にコロン(:)をつけ論文の開始ページと終了ページを省略しないでハイフン(-)で結び、最後にピリオド(.)を打ちます。同一巻が通しページとなっていない場合には、号数を()で巻数の後に示します。

[例]

- ⑤ Rowlands, A.V., Stone, M.R., and Eston, R.G. (2007) Influence of speed and step frequency during walking and running on motion sensor output. *Med. Sci. Sports Exerc.*, 39: 716-727.
- ⑥ Gray, R. (2004) Attending to the execution of a complex sensorimotor skill: Expertise differences, choking, and slumps. *J. Exp. Psychol., Appl.*, 10: 42-54.
- ⑦ Taylor, D. (2007) Performance efficiency rating for basketball. *Coach and Athletic Direction*, 26(1): 26-28.
- ⑧ 小野桂一・若吉浩二・山南真美・尾関美和・福本隆行(2002)バレーボールのセッターにおけるオーバーハンドパスについての研究—上肢に着目して—. *スポーツ方法学研究*, 15(1):127-136.
- ⑨ 徳永幹雄・橋本公雄(2002)健康度・生活習慣の年代的差異及び授業前後での変化. *健康科学*, 24: 57-73.

(5) 早期公開論文

正式に発刊される前の早期公開論文を引用する場合は、以下の例を参照し、巻(号)、ページの代わりにDigital Object Identifier(略称DOI)を記載してください。

- ⑩ 角川隆明・高木英樹・仙石泰雄・椿本昇三(2012)平泳ぎ泳パフォーマンスと圧力分布から推定した足部流体力との関係. *体育学研究*, doi: 10.5432/jjpehss.12003.

2) 単行本の書き方

書き方の原則は定期刊行物の項に従ってください。

(1) 単行本全体の場合

著者名(発行年)書名(版数, ただし初版は省略). 発行所. の形式とします. また, 編集(監修)書の場合には, 「編」, 「監」, あるいは「編著」と表記します. 英文では編集者が1人の場合は(ed.), 複数の場合は(eds.)をつけます.

[例]

- ⑪ 桜井厚(2002)インタビューの社会学. せりか書房.
- ⑫ Siedentop, D. and Tannehill, D. (2000) *Developing teaching skills in physical education* (4th ed.). Mayfield Publishing Company.
- ⑬ 原田宗彦・木村和彦編(2010) *スポーツ・ヘルスツーリズム*. 大修館書店.
- ⑭ Moritz, E.F. and Haake, S. (eds.) (2006) *The Engineering of Sport 6*. Springer.

(2) 単行本の一部の場合 論文(章)著者, 論文(章)の題名. 編集(監修)者名と「編」, 「監」, 「編著」など, 書名(版数, ただし初版は省略). 発行所, 論文(章)のページ (p. またはpp.) の形式とします. 英文の場合には, 論文(章)の題名. の後に “In:” をつけたあと編集(監修)者名と(ed.), または(eds.)をつけます. 編者が2名の場合, 和文の場合には中黒(・), 英文の場合には “and” を用いてつなぎます. ただし, 編者が3名以上の場合は, 筆頭編集(監修)者の姓の後に, 和文の場合には「ほか」, 英文の場合には “et al.” を用います.

[例]

⑮ Deery, M. and Jago, L. (2006) The management of sport tourism. In: Gibson, H. (eds.) Sport tourism: Concept and theories. Routledge, pp. 246-263.

⑯ 山崎喜比古(2008)ストレス対処能力SOCとは. 山崎喜比古ほか編, ストレス対処能力SOC. 有信堂高文社, pp. 3-24.

(3) 翻訳書の場合

原著者の姓をカタカナ表記し, その後ろにコロン(:)をつけて訳者の姓名を記入します. 共訳の場合は中黒で, 訳者が3人以上の場合は「ほか」と省略して筆頭訳者だけ記入します. 英文の翻訳書の場合, 原著の書誌データは執筆者が必要と判断した場合に最後にく>内に付記します.

[例]

⑰ ディクソン:水戸重之訳(2010)メジャーリーグの書かれざるルール. 朝日新聞出版.< Dickson, P. (2009) The unwritten rules of baseball. Collins. >

⑱ アメリカスポーツ医学会編:日本体力医学界体力科学編集委員会監訳(2006)運動処方指針原著第7版. 南江堂.

3) WEBサイトの場合

WEBサイト(いわゆるホームページ)やWEBサイトに掲載されているPDFファイルなどを参考文献とする場合, 「URLが変更される」「内容が変更される」「WEBサイト自体が閉鎖される」「文責が曖昧である」などの問題があります. そこで, WEBサイト上の資料は, (1)他に参照可能な公刊物(書籍や学術雑誌等)がないことの確認, (2)著者名と題目およびサイトの名称の確認, (3)参照時のURLおよび日付の記録, (4)内容の適切な保存(当該ページのプリントアウト等)を行った上で用いてください. そして, 文献表には「著者名(発行年またはonline)WEBページの題目, WEBサイトの名称, URL, (参照日)」をできる限り詳細に記載してください. なお, 学術団体等が発行する電子ジャーナル, 例えば日本体育学会が発行する“International Journal of Sport and Health Science”などは, 「1) 定期刊行物」としてあつかいます.

[例]

① 神奈川県立体育センター指導研究部(2006)学校体育に関する生徒児童の意識調査—中学生の意識.

<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/40/4317/sidoukenkyubu/kenkyusitu/kenkyu/h18-1.pdf>, (参照日2010年12月8日).

② 科学技術振興機構(online1)科学技術情報流通技術基準:目的別メニュー:文献を引用したい.http://sist-jst.jp/menu_purpose/index.html, (参照日2011年4月11日).

③ 科学技術振興機構(online2)科学技術情報流通技術基準:目的別メニュー:論文を書きたい.http://sti.jst.go.jp/sist/menu_purpose/index2.html, (参照日2011年6月11日).

④ U.S. Department of Health and Human Services(online)SF424 (R&R) Application and Electronic Submission Information.

http://grants.nih.gov/grants/funding/424/SF424_RR_GUIDE_SBIR_STTR_Adobe_VerB.pdf, (accessed 2011-07-01).

6. 英文抄録について

英文抄録の語数は、400語以内とします。この抄録には、原則として研究の目的、方法、結果、および結論などを簡明に記述してください。

- 1) 英文抄録については、編集委員会の責任において一応の吟味をします。英文に明らかな誤りがある場合には、原意を損なわない範囲で調整することがあります。
- 2) 英文抄録の作成にあたっては、特に次の点に留意してください。
 - (1) 日本国内で知られている固有名詞でも、海外の読者に知られていないようなものについては、簡単な説明を加えてください。
 - (2) 句読点としてのコンマおよびピリオドの後は1文字あけてください。
 - (3) 省略記号としてのピリオドの後はあけないでください。

7. 謝辞、付記など

公平な審査を期するために、謝辞および付記などは原稿「受理」後に書き加えることとし、投稿時の原稿には入れないでください。

IV. チェックリスト

「投稿規定」および「投稿の手引き」をよく読んだうえで、原稿を作成してください。以下はあくまでも形式的な事項についてのみと考えてください。

印字

- A4判横書き，全角40字30行のページ設定とした。
- 図表，写真，その他の資料はA4判横書きとし，その大きさが刷り上りと同様になるように作成した。
- 投稿規定の範囲内の文字数に収まっている。
- 本文・文献，図表・写真・その他の資料を揃え，通しページをつけた。
- 本文・文献のページには，行番号(ページごとに振り直し)をつけた。
- 著者名や所属機関など投稿者の情報は表紙にのみ記載し，本文に記載はない。

記述

- 英文抄録および英文抄録の和訳を作成した。
- 図表，写真，その他の資料の番号は本文中に出現する順序通りである。
- 本文中の引用と文献表のあいだで，綴りや発行年が合致している。
- 本文中の注と注釈の番号が一致している。
- 原稿にすべての図表，写真，その他の資料の挿入箇所が示されている。
- 句読点は「，」「。」を使用した。
- 文献表は著者名のアルファベット順，ついで刊行年順に並べた。
- 謝辞や付記は記述していない。

再提出

- 再提出期限内の投稿である。
- 再提出論文の本文には，修正箇所が明確になるような文字修飾(赤字，下線など)を施していない。
- 審査員ごとに「修正対応表(回答コメント)」を作成した。その際，ページ数や行番号などを用い，個々の指摘に対して修正・対応箇所を明示した。

研究者の倫理について(覚書)

近年、体育・スポーツに対する社会的、教育的関心が急速に高まるとともに、その科学研究に対する期待がますます増大している。他方、国内的にも国際的にも、生命の尊厳や人格の尊重、あるいは動物愛護の観点から、研究者の研究上の倫理にかかわる勧告や規定などが出されている。わが国でも、人間や動物を対象とした研究に関する倫理指針に基づき、倫理審査委員会を充実させることや研究実施体制を確保することが各研究機関に求められている。人間を対象とすることの多いわれわれ体育学の研究者は、研究の遂行に当たって、目的の設定、計画の立案、方法の選択、被験者の選定、実験・調査の実施、結果の分析・処理、経過の公表などのすべての過程にわたって、人権の尊重と安全の確保を最優先し、かつ法に基づいて研究が行われることに充分の配慮を払うべきことを改めて確認しなければならない。また動物を対象とする研究においても、動物愛護の精神に基づいて、同様の倫理的配慮がなされなければならない。社会的、教育的要請に応えて、体育学を一層発展させるために、われわれは、このことを個人として正しく認識し、会員相互に徹底を図るとともに、研究を行うにあたっては、所属する機関や組織などにおいて、倫理審査を受けることをその責務と考えるべきである。なお、体育学の研究成果の応用される場である体育・スポーツの実践に対しても、研究者、あるいは指導者として、同様の倫理的配慮が十分になされていることを再認識する必要がある。

(平成 年 月 日 平成 年度総会において採択)